

# 社会科における対話型学習の構築

## ～身近な地域学習を通して対話力を育てる～

片桐 宏

社会科学習では、知識や技能だけではなく、関心・意欲、資料活用力、社会的判断力、表現力、意志決定力を重視することが大切である。それらの基礎・基本となる能力の育成や定着を目指すためには、単元構成や課題の中に対話型学習を取り入れ、社会的事象、自分、他者との対話を深めさせなければならない。ひとり学習で調べ考える活動をより充実させ、全体学習で学び合う中で対話力を育成したいと考えた。対話によってお互いの学びを高め合い、自分の思いや考えを更に深めるといった対話型学習を発展させることをねらいと位置づけ、本研究テーマを設定した。本年度、3年の社会科学習を進めた結果、学ぶ意欲や情報収集力・表現力の向上が見られたとともに、多角的に社会的事象を考えることで価値判断力が伸長したと考えられる。しかし、指導者側の単元全体を見通す洞察力や学習課題設定の困難さ、発問の重要性などが課題として残った。

キーワード：対話型学習、対話、対話力、単元構成や学習課題、ひとり学習

### 1. はじめに

#### 1.1. 社会科学習で大切にしたいこと

社会科学習では、見える学力（知識や技能）だけではなく、関心や意欲、思考力、社会的判断力、表現力、意志決定力といった見えない学力も重視することが必要である。また、知識の定着を図るには単に覚えるだけではなく、主体的な追究活動を通して社会的事象と深く関わらなければならない。そのためには子どもたちが主体的に調べ考えられる社会的事象が必要となってくる。その社会的事象に対し、ひとり学習で自分なりに課題を追究し、生じた疑問などを解決していく。また、全体学習の中で他者と学び合い、お互いの学びの中で考えを更に深め合っていくのである。その学習を通し、自分なりに思考・判断しながら課題を解決する力だけではなく、調べた内容を自分なりに表現する力、学習の成果を自らの生活向上のために生かす力などを身につける必要がある。また、社会的事象を一面的に調べるのではなく、多面的にとらえることで事象や課題を公正かつ総合的に判断する力を育むことも大切である。事象の多くは、立場を変えて見れば異なる見解が生じるものであり、より広い視野から考察・判断することで個性的な見方や考え方が育っていくのである。このような「こだわりをもちながら学習を進めていける子」をめざす子どもの姿と考えている。

#### 1.2. 社会科学習における対話とは

社会科学習を進める中で、一人ひとりの主体的な追究活動を通して、社会的事象と深く関わらなければならない。また、全体学習で話し合う場面などでは友だちの多様な考えに触れ、意見交換したり共有したりす

ることで社会的事象に対するより深い学びがつけられていくのである。社会科学習では自分と違った考えをもつ他者との対話を通して、「自分と他者の考え方の違い」、「他者の考えの根拠」、「どちらが妥当な判断をしているのか」など、自分と他者を比較しながら自分の考え方や判断などをより確かなものにしていくことが大切だと考えている。対話力を高めるためには、他者を尊重する受容的な態度、しっかりと聞く力、質問する能力、他者に自分の考えをわかりやすく伝える力などが必要になってくる。社会科学習における対話について、次のように考えている。

##### ①社会的事象との対話

一人ひとりが調べ考える社会的事象に対する対話。単元構成や課題などの学習内容と関連している。3・4年社会科学習では、地域の「ひと、もの、こと」と直接触れ合うことができる点が特色である。自分自身の目や耳、足などを使って観察、調査する中で、社会的事象について様々な対話を行う。

##### ②自分との対話

社会的事象に対し、自分自身で調べ考える対話。自分が観察した知識を確かなものとするために資料を活用しながら根拠を明らかにする。知識が広がる場面や他者からの情報が影響して考えが変わることもある。観察力や資料活用能力が必要となる。また、それらの活動を通し、社会的思考力を育てることができる。

##### ③他者との対話

他者との学び合いの中で、考えを深め合う対話。他者の考えから新しい知識や情報を得ることができる。また、自分の考えと他者の考えを比較することで、自分の価値観、見方や考え方を明らかにする。他者の思いや自分とは違った考えに触れることで、学習課題をみんなで解決することにつながる。

## 2. 対話型学習の育成に向けて

社会科学習では、子どもたちが主体的に調べ考える活動を展開する上で単元構成が重要な位置をしめる。指導者側のねらいを考慮しながら、子どもたちにとって身近で学ぶ意欲がもてる単元構成を考える必要がある。単元の中では探究活動を行うひとり学習と、みんなで話し合う全体学習を取り入れて学習を進めた。

ひとり学習は、一人ひとりの子どもたちが学習課題について意欲的に調べ考える場面であり、社会的事象や自分自身との対話を行う。問題意識をもって学ぶ態度や自分の言葉で表現する力、学習の成果を自らの生活向上に生かす力などが身につくとともに、社会的事象の意味や働きなどを考える力を育て、自分が調べたことを整理しながら考えが深められる活動でもある。

全体学習は、ひとり学習で調べ考えた内容を出し合うことで他者と対話する場面である。学習の経過や成果を交換・交流させることで他者の多様な考えに触れ、社会的事象へのより深い学びがつけられるのである。

このような対話型学習では、相手の意見にしっかりと耳を傾け、自分の考えをさらに発展させて発言することが大切になる。対話型学習を進める上で、次の4点を大切にしたいと考えた。

### (1) 座席表の活用

座席表を活用することで、対話型学習がスムーズに進むと考えている。自分と同じ考え方をする子、相反する意見をもっている子など、事前に座席表を子どもたちに見せることで質問事項を整理することができるし、課題に対して幅広く考えられるという利点が多い。一人では苦手な発表を複数名でできるという利点もある。指導者側から考えても、一人ひとりの確かな見とりと支援にもつながる。

### (2) 単元構成や学習課題の設定

対話型学習で特に重要なのは単元構成と学習課題である。3・4年社会科の学習では、観察や調査・見学、体験などの具体的な活動を取り入れることで、社会的事象をより具体的に捉えることが大切である。身近な地域の「ひと、もの、こと」と触れ合うことで社会的事象に対する理解が深まる。学習課題は子どもたちの考えが大きく二つにわかれるものが理想である。学習課題は学習を進める中で考えられるものであるが、対話型学習をより深められるような共通性のある課題が理想である。

### (3) 着目見の設定

数名の着目見を設定し、対話型学習に活かそうと考えた。対話型学習の基盤となるのはひとり学習である。ひとり学習で、その子が何について調べ考えているのか、今どのような資料を準備しているのか等を把握することが着目見の見とりや支援につながる。また、着目見の発言内容や考え方を通して単元構成や学習課題の適切さ等を読み解くことができる。

### (4) 対話力の向上

社会科学習では発表の根拠となる資料を大切にしたいと考えている。「〇〇に書いていた」・「〇〇の資料を見て考えた」といった対話型学習の共通の基盤をつくることが大切である。対話型学習を進めるには自分の思いや考えを発表する力、他者の考えを正しく聞く力が必要となる。また、自分の思いや考えを他者と比較しながら質問する力、相手の違いを認め受け入れていく受容的な心や態度も大切となってくる。対話力は社会科学習の中だけでは身につかないと考えている。他教科や領域の学習の中で、幅広く対話力を伸ばしていかなければならないと考えている。

## 3. 単元学習の実際

本研究において取り組んだ2つの単元学習について報告する。

### 3.1. 「わたしたちのまち みんなのまち」の学習より

3年生の子どもたちにとって初めての社会科学習である。附属小学校の周辺の探検活動から学習がスタートした。道路や目印になる建物などを中心に調べ、それを絵地図に表現した後、白地図にまとめた。地図を作るのは難しく、何度もその場所を調査・見学するグループの姿も見受けられた。絵地図や白地図にまとめる作業をグループで話し合いながら行うことで、自分や他者との対話が深まると同時に、地図記号や地図の見方などの知識も正しく身についた。また、絵地図作りの発表会を行うことで自分たちが調べた内容をみんなに伝達することもできた。

附属小学校はどんな場所にあるのだろうか？  
○和歌山市の中心にある。 ○お城に近い。  
○公共施設が多い。 ○多くのお店がある。  
○バスや自動車がたくさん走っている。



図1. 絵地図をもとに、グループで白地図作成  
次に、自分たちが生活している和歌山市の様子を調べることにした。ここでの学習では、和歌山市の広がりを知るとともに、和歌山市の地形や土地利用

などに関心をもたせることをねらいとした。本校の子どもたちは和歌山市全域からバスや電車を利用して登校している子が多い。そこで、自分の家の周辺の地図を作成することにした。それをみんなに紹介することで、和歌山市の広がりを感じ取ることができる考えたのである。その後、和歌山市の特色ある地点を選び、クラスのバス旅行を実施した。

和歌山市の学習の後半に、『和歌山市って、〇〇なまち』という学習課題を設定して話し合った。今までの学習で新たに獲得した知識や生活で感じている内容を自分なりに整理し、クラスでの対話を行った。



図2. 和歌山市の土地利用の様子（白地図）

自分が準備した資料を用いながら和歌山市の特色や特徴について出し合った。自分の調べまとめた内容を発表し、友だちの発表を聞きながら自分の思いや考えと比較する中で、新しい考えや思いが生まれるのである。和歌山市は田や畑が多く、海や山にも囲まれている反面、住宅地や工場も多い都市でもある。この学習では、場所や地形によって様々な土地利用があることを理解することができた。また、グループで和歌山市の将来について考える発展的な課題を与えた。大きく分けて、

- ① 緑を多くし、自然いっぱいのまちにしたい。
- ② 市街地が多く、にぎやかで便利なまちにしたい。
- ③ 今のままのまちでいい。（バランスがいいから。）

という考えが出された。それぞれの意見を交流させる中で、自分との対話が更に深まるとともに和歌山市の様子がより確かなものになった。

### 3.2. 「地域のおまんじゅう屋さん、

そして『総本家 駿河屋』の学習より

「地域の生産や販売に携わっている人々の働き」の学習で、地域にあるおまんじゅう屋を取り上げた。『総本家 駿河屋』だけにスポットを当てるのではなく、自分の生活の中でより近くにある、地域に根ざしたおまんじゅう屋についても調べるのが大切であると考えたのである。前述したように、子どもたちは和歌山市全域（大阪府阪南市、紀の川市を含む）から通学している。その利点も生かしながら、地域にあるおまんじゅう屋を調べた。子どもたちは家の

近くのおまんじゅう屋を調べる活動に取り組んだ。休日や放課後を利用して店を探し、インタビュー形式で聞き取り調査を行った。何度もその店を訪れ、実際に餅やまんじゅうを作らせてもらった子もいた。調べた内容は、店の歴史やおまんじゅうの作り方だけではなく、そこで働いている人々の工夫や努力、こだわりまで調べる子も多かった。自分の目や耳、足を使って調べる活動は、社会的事象に対しての対話を確かなものとするとともに、自分との対話を深めることにもつながるのである。

子どもたちが調べた地域のおまんじゅう屋さん

- |            |            |
|------------|------------|
| ○紫香庵（城北）   | ○ふく福団子（広瀬） |
| ○鶴屋忠彦（城北）  | ○春栄堂（和歌浦）  |
| ○粉吉（砂山）    | ○歌屋（高松）    |
| ○華屋（中之島）   | ○松葉屋（大新）   |
| ○不二屋（和歌浦）  | ○いさと（吉田）   |
| ○富貴屋（美園）   | ○国華堂（秋葉山）  |
| ○むか新（貴志川町） | ○一寸法師（小雑賀） |
| ○大谷屋（園部）   | ○山崎製菓（岩出市） |
| ○駿河屋（高松など） | ○松風庵（鳴神など） |

次に、おまんじゅう作りを体験した。実際におまんじゅう作りを自ら体験することは、店で働く人々の努力や工夫を知ることにもつながる貴重な体験である。作業工程は、材料を実際に量りとり生地づくりから蒸し器で蒸すまで行ったが、水分や膨張剤がほんの少しでも多くなると、固くなったりする点など、おまんじゅう作りの難しさを実感することができた。同時に、職人さんの手際の良さや作業の速さに驚かされた。



図3. おまんじゅう作りの体験

地域のおまんじゅう屋調べを通して、店の数や場所もわかり、おまんじゅうマップが完成した。調べたおまんじゅう屋の多くは、従業員2～10名程度の小さい店がほとんどだった。また、それらの店は50年～120年もの間、おまんじゅうを作り続けていることもわかった。（『総本家 駿河屋』は約540年前）

調べたおまんじゅう屋の発表会をした後、「スーパーマーケットのようなチラシ（宣伝）を見かけないがなぜだろう？」、「もっと売れるようにする方法は？」、「若者にも食べてもらうためには？」といった疑問が生じ

てきた。おまんじゅう屋に対する自分の調べだけではなく友だちの調べに触れ、対話を深める中で新しい問いが生まれたのである。そこで、学習課題を次のように設定し、その課題について調べ考えさせた。話し合いがより活発になる対立的な学習課題ではないが、自分の調べたおまんじゅう屋の内容や資料を整理し、一人ひとりが根拠をもって示されると予想された。

学習課題： なぜ、おまんじゅう屋さんは、  
今までつづいてきたのだろうか？

話し合いの場面では、地域のおまんじゅう屋のこだわりや工夫、日々の努力などの考えを交流させた。おいしい味を出すために原材料にこだわっていること、季節限定商品や看板メニューのこと、伝統を守り続けている証しである包装紙についての考え方も出された。また、自分たちが体験した手作り作業の困難さ、安心・安全に気をつけている店側の努力、後継者問題など、自分が調べたおまんじゅう屋の事柄を根拠にしなが幅広い考え方が出された。後継者問題では職人の技を受け継ぐ重要性にも触れながら話し合った。この地域のおまんじゅう屋の学習は、『総本家 駿河屋』に連続してつながるという考えから、学習の終末部分に『総本家 駿河屋』の職人の方をゲスト・ティーチャーに招き、伝統の技の話の話を聞かせてもらった。



図4. おまんじゅう屋さんについて考えを交流する

#### 4. 単元学習の考察

「わたしたちのまち みんなのまち」の単元では、学校周辺の絵地図作りからスタートし、自分たちの生活している和歌山市の様子を考察した。子どもたちの地図に対する認識が大きく広がるとともに、この単元のねらいでもある身近な地域や市の様子について調べ、場所による様子の違いや特色を具体的に考えることができた。また、グループで観察や調査をすることで、多くの友だちとの対話が進み、自分の考えを更に深めることにもつながった。学校周辺の探検だけではなく、和歌山城天守閣から市の広がりを観察することやバスを使って和歌山市の特色ある地点をみんなで回る活動も取り入れた。活動を重視した単元であるが、子ども

たちはとても意欲的に取り組むことができた。

「地域のおまんじゅう屋さん、そして『総本家 駿河屋』の単元のねらいは、地域での生産や販売活動の仕事の様子を調べ、そこで働く人々の工夫を具体的に考えるようにすることである。地域のおまんじゅう屋を見つけ、その店を何度も訪れながら調査を行った。おまんじゅう作りという体験活動を通して、毎日たくさんの商品を作り続けている職人の努力や工夫だけではなく、それぞれの店のこだわりなども考えることができた。また、自分が調べ考えたことや新たに発見したことを資料にまとめ、わかりやすく友だちに伝えることもできていた。話し合いの場面では、多様な考えを発表し合い、友だちの考えもしっかりと聴く姿勢が身につけてきた。学習課題の適切さや学習展開の難しさもあるが、切実な問題点を示した場面で少し時間をかけ共通した視点で討論できればよかったと考えている。

2つの単元学習の中で学習プリントや座席表を活用し、一人ひとりの活動の様子を把握するように努めた。

#### 5. 成果と課題

3・4年社会科学習では、地域の「ひと、もの、こと」と直接触れ合う中で、地域学習を進めることが特に重要である。今年度、様々な見学や調査、体験活動を通して地域の社会的事象と対話できたことが大きな成果である。単元構成の中にそれらを位置づけることで地域の様子がより身近に捉えることができ、社会的事象に対する学ぶ意欲の向上や知識の獲得が見られた。

次に、対話型学習を進める中で、自分が調べた内容をわかりやすく資料にまとめ、自分の言葉で上手く伝えるといった資料活用能力や表現力も大きく伸長している。しかし、自分が考えたことを相手の話につなげ、相手に伝えるといった相互の対話が十分にできるところまで至らなかった。友だちとの対話を行う中で、自分の思いや考えがより深まるという点を大切にしながら学習を進める必要がある。同時に、全体学習の場面で新たな疑問や質問が生まれるような発問の設定などの工夫も必要であるので今後の課題としたい。

対話型学習を進めるには学習課題が対話の質に大きく影響を与える。子どもたちが学習の中で見つけ出した疑問点を解決するため、友だちと対話ができる学習課題が理想である。また、対話がスムーズに進むような学習課題を設定することを視野に入れた単元構成をさらに工夫する点も課題として残った。そのような単元全体を見通す洞察力が、今後更に必要であると考えている。

#### 《参考文献・資料》

- 『社会科授業が対話型になっていますか』  
安野 功 明治図書 2006年
- 『社会の見方を鍛える討論の授業』  
田中 力 学事出版 2004年